

News Letter  
"HANDS next"

vol

23

## 外国人児童生徒教育推進協議会報告

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター  
センター長 (HANDS 部門代表)

田巻 松雄

外国人児童生徒教育協議会は、今年度、9月7日と1月16日に2回開催した。いつもの同じメニューは、参加者による現場報告と情報・意見交換である。数値的なことも含めた整理はまだしていないが、「日本語が全く分からない子が突然入学してきて大変な対応に追われている・・・」という趣旨の発言が何人かから発せられたのが印象に残っている。現場で何が起きているのか、引き続き注視していきたい。

1回目では、今年度年度計画、外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣状況、昨年3-4月に実施した第7回目の進路状況調査結果(栃木県内のすべての公立中学校卒業生を対象にした調査)を報告するとともに、栃木ケーブルテレビ番組「栃木市における多言語による高校進学ガイダンス」(2016年10月1日)と真岡市いちごテレビ番組「真岡市 AMAUTA 夏期集団学習支援」(2014年度)を放映した。そして、国際学部4年生のオルティスゆみこが学生ボランティア派遣体験談を発表した。学生が協議会の場で体験談を発表するのは初めてのことと思う。彼女は栃木市の中学校に通うペルー人女子生徒を3年間続けて支援してきた学生である。1人の生徒を3年間支援してきた例はないと思う。その学生は昨年度私立の高校に進学することが出来た。体験談では3年間の様々な思い出が語られたが、自分にとって印象的だったのは、支援を始めた

当初、「勉強を教える」という気持ちで向き合ってきた自分のやり方が失敗だったと語ったことである。それよりも大事なことは、まずは、外国人でも頑張れば道が拓けることを伝え、勉強や進学に対するモチベーションをあげることが重要であることを理解するようになり。それを意識してロールモデル的な役割を果たしながら支援に臨んだことが、いろいろな課題はあったにせよ、高校進学を可能にした要因としては大きかったと思う。目標を発見し、自信をつけさせる支援の重要性を改めて教えらえた気がした。

2回目では、横浜の公立修悠館高等学校の井上恭宏さんに話をしていただいた。修悠館は2つの通信制高校が併設された通信制独立高校である。2008年(平成20年)4月に開校した。普通科で、単年度募集人数は1250人である。単位制のため学年はなく、新入生から卒業間近の生徒まで、さまざまな学習状況の生徒が36学級に在籍して学習している。2017年度(平成29年度)5月現在の在籍数は2210名である。2017年度(平成29年度)の外国につながる生徒の在籍数は153名で、フィリピンにつながる生徒が45名、中国につながる生徒が11名、ブラジルやペルー、ボリビアなどラテン・アメリカにつながる生徒が46名、その他となっている。本校で長らく外国人生徒指導に関わってきた井上さんの

## II 活動報告

お話から、通信制高校の果たしている役割や可能性、課題など多くのことを学んだ。

昨年8月関西の大学で井上さんの発表を聞く機会があり、通信制高校の現実に衝撃を受けるとともに、外国人生徒が学ぶ場としての定時制や通信制高校にあまり関心を向けてこなかったことを痛感させられた。外国人生徒が定時制高校や通信制高校を進路先に選ぶ理由としては、入りやすさに加えて、年齢・生活環境・国籍等が多様な生徒が在籍しており、全日制高校のような学力主義・集団行動・画一的雰囲気少なく、「学びやすい」学校文化や環境が存在することが大きく関係しよう。そして、外国人生徒を受け入れ積極的にサポートをする定時制通信制高校が拡大してきたことがある。栃木県でも、定時制課程と通信制課程のある併設校である公立の学悠館高等学校が2005年（平成17年）に設立されている。定時制課程では在籍数568名（2017年7月1日現在）のうち22名が外国籍の生徒（Ⅰ部7名、Ⅱ部7名、Ⅲ部8名）となっており、母語の内訳は、スペイン語が9名、タガログ語が8名、ポルトガル語3名、ウルドゥー語が2名、中国語が2名となっている。一方通信制課程では、外国につながる生徒の在籍は8名で、そのうち日本語の支援が必要な生徒はパキスタンに

つながる生徒が3名、ブラジルにつながる生徒が2名の計5名である。今年度初めて本校の通信制で学ぶ外国人生徒の学生ボランティア派遣を行った。

レポート、スクーリング（面接指導）、試験という3段階の学習によって単位を取得していく通信制の教育は、文字コミュニケーションを主体とするもので、レポートを日本語で作成することが外国人生徒にとっては高いハードルとなると言われてきたが、通信制で学ぶ外国人生徒は相当数いるのではないか。ちなみに、文科省の最新の数字では、日本語指導を必要とする全国の高校生の課程別の生徒数を示しておく、総数3,545,027人、全日制3,243,422（91.5%）人、定時制112,187（3.2%）人、通信制189,418（5.3%）人である。通信制に通う生徒は20人に1人である（2014年度データ）。定時制や通信制が外国人生徒の学ぶ場として担っている社会的役割についてももう少ししっかり見ていきたいと感じた協議会であった。

上記に触れたが、今年度の事業で今までになかったものは、高校への学ボラ派遣を実施したことである。高校進学後に特別な支援を要する生徒にどのように向き合っていくのか、これもまた大きな課題である。

---

---

# 「多言語による高校進学ガイダンス」

## 開催報告

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター

船山千恵

10月29日（日）14時から、本学大学会館において「多言語による高校進学ガイダンス」を開催しました。2010年より毎年開催し、今回で8度目の開催です。このガイダンスは、日本語を母語としない子どもたちやその保護者を対象にして、日本の教育制度や高校受験に関する情報を正確に提供することを目的に開催するものです。

内容は例年どおり、「言語別テーブルごとのガ

イダンス」、「全体質疑応答」、「体験談発表」でした。台風の影響が心配されたため、今回は、最後の「アンケート」は省略しました。

第1部では、日本語を含む9か国語の資料を用意し、通訳を介して説明しました。親切で丁寧な説明をしてくれる通訳者、その説明に真剣に耳を傾ける外国人児童生徒の保護者、この場に参加者生徒を一緒に連れてきてくれた支援者、

多くの方に支えてもらっている状況を外国人児童生徒たちは実感している様子が伺えました。

第2部「全体質疑応答」で出された主な質問は、以下の通りです。

- (1)特色選抜と一般選抜を両方受検することができますか？
- (2)特別措置はAとBの両方を受検して、同じ学校の一般入試を受検することができますか？
- (3)小学校・中学校では資料や通知をポルトガル語やスペイン語に翻訳してくれますが、高校入試や高校生活でも同じですか？
- (4)私立高校を単願で受験した場合、公立高校を受検することはできますか？

これらの質問に、回答者の先生方に丁寧に答えてもらい、そして通訳者に母語で説明してもらいました。

第3部では、中国にルーツのある孟伶諭さん(宇都宮大学国際学部1年)に体験談発表してもらいました。その内容については、3ページに掲載してあります。外国につながるのある児童生徒だけでなく、かれらと関わる教職員の方々にも是非読んでもらいたいと思っています。

参加児童生徒数を言語別にみますと、スペイン語6名、ポルトガル語4名、中国語3名、フィリピン語1名、タイ語1名、英語3名で、「やさ



しい日本語」には、2家族の参加がありました。中学生は、11名、小学生は、6名、既卒等は3名でした。市町別では、宇都宮市5名、小山市7名、真岡市4名、大田原市1名、日光市1名、不明2名でした。このように、いろいろな国や地域にルーツを持つ子どもたちとその保護者に、県内各地から参加していただきました。

外国にルーツのある子どもたちにこのガイダンスに参加してもらうことで、高校進学など近い将来に向けて家族や学校の先生と話し合ってもらえたら、と思いながら準備してきました。翻訳者・通訳者をはじめ、各市教育委員会、各小中学校長、教職員、支援者等、多くの学外関係者の協力を得て開催することが出来ました。外国人児童生徒教育支援に強い関心を示す学生団体 HANDS Jr の協力も忘れてはなりません。ご協力いただきましたすべての方々に厚く御礼申し上げます。



## 諦めないこと

宇都宮大学国際学部1年

孟 伶 諭

私は日本に来て今年で5年目です。この5年の中で、生活の面でも、勉強の面でも大変なことがたくさんありました。今日は、私がどうやって乗り越えてきたのをみんなに話したいと思います。私の経験が、皆さんに少しでも役に立ったら嬉しいです。

私は日本に来た時は中学三年生の時でした。日本語が全くできないままで中学校に入りました。その中学校では、外国人の生徒は私だけでした。言葉が通じないから、友達もできないし、自信を持つこともできなかったです。元々性格が外向的

な私が学校で本当に静かでした。昼休みの時いつも一人でした。その一年では本当に寂しくて辛かったです。その時から高校では絶対このような生活を繰り返したくないと思い、日本語を一生懸命に勉強すると決めました。まずは、家ではひらがなやカタカナを勉強しました。そして、学校の担任の先生から市内の小学校にある日本語教室を紹介してもらいました。私は週1回日本語教室に通いました。自分の分からない文法や難しい言葉など1週間分を整理して、日本語教室に行くと

## II 活動報告

きは、たくさんの質問をしていました。日本語教室の先生がとてもやさしくて、中国語もとても上手で大変お世話になりました。今も感謝の気持ちでいっぱいです。日本語教室だけではなく、私在家でも頑張って家族と日本語を使っていました。

高校受験の時に、私は栃木県の県立高校の「海外帰国者・外国人等の受検に関する特別措置」という検査で受験しました。入試内容は3教科と面接でした。そして、国語の入試の代わりに小論文がありました。数学と英語が得意だったので、心配しなかったのですが、小論文はその時日本に来てたった1年の私にとって本当に難しかったです。そこで、私は、まず、中国語で書いて、その後、日本語教室の先生といっしょに日本語に直しました。そして、その中で分からない文法を勉強して、暗記しました。小論文は、いろんなテーマについて、何度も書いて、たくさん練習しました。面接も先生と一緒に何回も何回も練習しました。学校と日本語教室のお陰で無

事に高校への進学ができました。

高校に入学できた後、私は自分から声をかけて友達を作ろうとしました。自分の日本語が間違っているとわかっていても頑張ってみんなと話しました。自分の日本語をたくさん話すことがとても大切だと思います。なぜなら、友達と話することによって、正しい日本語を聞いて、覚えられるし、自分の間違っている日本語があったら友達が直してくれるからです。私は友達とのコミュニケーションの間でたくさん日本語の勉強になりました。高校では、友達がたくさんできましたので、高校生活は本当に楽しかったです。

今日は私と同じ立場にいる外国人生徒に言いたいことがあります。外国に来て大変なことはもちろんたくさんあります。でも、そこで諦めないで、大変なことを乗り越えれば楽しいことがいっぱいあります。たくさんの困難を克服することによって、自分が成長します。今自分が経験したことはきっと自分の財産になります。



### 本学における多言語による高校進学ガイダンス(2017.10.29)関係者・協力者一覧

	名前	所属等	当日の主な役割など
1	田巻松雄	宇都宮大学国際学科長、HANDS部門代表	全体責任者、開会あいさつ
2	若林秀樹	宇都宮大学国際学部客員准教授	質疑応答登壇者
3	佐藤和之	真岡市立真岡東小学校教諭	質疑応答進行役
4	鈴木則子	宇都宮市教育委員会学校教育課指導主事	質疑応答登壇者
5	小林忠教	栃木県国際交流協会事務局長	閉会あいさつ
6	渡辺美千恵	栃木県立真岡女子高等学校教諭	質疑応答登壇者
7	山中亮	小山市立桑中学校教諭	質疑応答登壇者
8	孟伶諭	国際学部 1年	体験談発表者
9	市川 恭治	社会人協力者	通訳 (フィリピン語)
10	植田エレニセ	社会人協力者	通訳 (ポルトガル語)
11	朝日美和	社会人協力者	通訳 (ポルトガル語)
12	船山千恵	多文化公共圏センター職員	運営全般
13	小波津ホセ	大学院国際学研究科 後期博士課程	スペイン語通訳
14	齋田雛	国際学部 1年	通訳 (英語)
15	内藤大賀	国際学部 1年	設営補助
16	北川瑛	国際学部 1年	通訳 (英語)
17	丁美誉	国際学部 1年	通訳 (中国語)
18	张 梓懿	国際学部 1年	通訳 (中国語)
19	アギーレ ナルミ	国際学部 2年	通訳 (スペイン語)
20	葦澤怜子	国際学部 2年	質疑応答記録
21	王希璇	国際学部 2年	通訳 (中国語)
22	佐藤みき	国際学部 3年	司会
23	村上朋映	国際学部 3年	運営補助
24	栗原義一	国際学部 3年	通訳 (英語)

25	椎名史織	国際学部	3年	通訳(タイ語)
26	遠藤さくら	国際学部	4年	受付・運営補助・書記(英語)
27	桑田梢	国際学部	4年	質疑応答記録
28	岡本菜摘	国際学部	4年	通訳(スペイン語)
29	沖館由依	国際学部	4年	設営補助
30	小泉はるか	国際学部	4年	司会
31	佐藤春菜	国際学部	4年	書記(やさしい日本語)
32	郷間小百合	国際学部	4年	通訳(中国語)
33	青木彩香	国際学部	4年	書記(スペイン語)
34	高林直貴	国際学部	4年	書記(タイ語)
35	長谷沙樹	国際学部	4年	書記(ポルトガル語)
36	徐小雨	国際学部	研究生	受付
37	黄少偉	国際学部	研究生	受付
38	耿蘭竺	国際学部	研究生	受付

### 多言語による高校進学ガイダンス(地域開催)のまとめ

1 開催地	大田原市	栃木市
2 開催日時	2017.9.23(土・祝)14時～	2017.9.30(土)14時～
3 開催場所	TOKOTOKOおおたわら	栃木市役所正庁
4 共催	大田原市教育委員会・那須塩原市教育委員会・宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター	栃木市教育委員会・宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター
5 参加家族数(言語別)	2家族(ポルトガル語1、中国語:1)	5家族(スペイン語1*、ポルトガル語1、フィリピン語1、タイ語1、英語1、大学進学1*、*印のものはきょうだい)
6 体験談発表者の背景	孟伶論:中国にルーツ・宇大国際学部1年	ヒトみどり:ペルーにルーツ、茨城県立結城第二高等学校1年
7 協力者数(6を除く)	通訳2+大田原市教委指導主事1+那須塩原市教委指導主事1+大学関係者2	通訳6+栃木市教委学校教育課長+栃木市教委指導主事6+中学校教諭1+大学関係者4
8 主な質問	・特別措置について ・国際的なことが学べる高校について知りたい	・授業料などの費用について ・特色選抜について ・特別措置A・Bについて ・宇都宮大学国際学部外国人生徒入試について
9 参加者アンケートおよび事後感想から	・こういった集まる機会がもっとあったらいいと思う。 ・体験談発表を通訳してくれた孟さんから経験を聞けて、いろいろ考えさせられました。今から日本語の勉強を頑張りたいと思います。	・高校についてのたくさんの情報を得ることができました。通訳がいたので理解するのが簡単でした。 ・大学へ進学してサッカーを続けたい。そして、プロになって、父の会社を大きくしたい。

## 平成29年度子ども国際理解サマースクール報告

国際学部附属多文化公共圏センター長

田巻 松雄

### 1. 事業の目的・意義

2017年8月9日、宇都宮市教育委員会東生涯学習センターと国際学部附属多文化公共圏センター HANDS プロジェクト部門の協働で「子

ども国際理解サマースクール」を実施しました(8月8日と9日に開催予定でしたが、台風のため9日のみ開催)。本事業は、HANDSとしては8回目となる多文化共生教育実践です。

## II 活動報告

前日の8月7日、気象庁の発表によりますと、8月8日は、西日本を通過した台風5号が東日本に達する見込みで、台風の動きが遅いため、東日本では大雨や暴風が長時間続く見込みでした。そのため、宇都宮市教育委員会東生涯学習センター長より連絡があり、児童の安全を最優先に判断した結果、7日の夕刻に、第1日目の8日は中止の決定をしました。第1日目の講座を担当する学生たちは、長い間、講座内容の検討・プログラム立案等、準備してきましたので、なんとか第1日目に予定していた内容を2日目に実践できるよう第2日目に組み込むことになり、プログラムを急遽練り直しました。

受講者は、宇都宮市内の小学生4年生～6年生で、今年は、22名の子どもたちが参加しました。宇大生は22人（田巻ゼミ生2人を含む国際学部の学生14人、カンボジア、ベトナム、ドイツ、台湾からの留学生8人）でした。

例年、第1日目の目的は、毎年、一つの国や地域をテーマに取り上げ、子どもたちの目を世界に向けるきっかけづくりで、第2日目の目的は、宇大生の学生団体HANDS Jrや宇大留学生などの企画・支援のもと、かれらと直接交流しながら、参加小学生たちの国際感覚を養うことです。今年は、第1日目が中止となりましたので、1日でその両方の目的を達成すべく、内容を凝縮させた分、充実した国際理解教育の実践となりました。

### 2. 事業内容

#### (1) 参加型講義

午前の部：8月9日午前10時～昼食まで  
テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう2017  
～フィリピン編～」

#### (2) 国際交流

午後の部：8月9日昼食後～午後2時まで  
テーマ「世界を感じよう2017  
～宇大留学生たちとの交流～」

### 3. 事業の進展状況

#### (1) 午前の部

テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう2017

#### ～フィリピン編～

フィリピンにルーツのある田巻ゼミ生の小野寺まゆみ（国際学部4年）さんが中心となって、フィリピンについて学びました。



まずは、アイスブレイクとして、フィリピンについての4択クイズを行いました。地理的な問題から始まり、約7,000という島の数に驚きました。

2つ目の活動として、『Let It Go』をフィリピン語で歌いました。

そのあと、Ako si TARO. (わたしは太郎です。)という自己紹介や、Ang pogi mo. (あなたはかっこいいですね。)など、友だちを褒める言語活動を取り入れ、挨拶と同時に常に褒めるコミュニケーションをするフィリピン流のコミュニケーションを楽しみながら体験しました。

そして、フィリピンの子どもたちの遊びの一つ、バンブーダンスをしました。「1, 2, 3, 1, 2, 3」と3拍子のリズムの曲に合わせて、開いたり閉じたりする竹に足が挟まらないようにダンスします。はじめは難しそうに見えたこの遊びでしたが、練習するとすぐに子どもたちは上達し、楽しんでいました。



休憩時間には、フィリピンの清涼飲料「カラムンシージュース」の試飲をしました。主原料

は柑橘の果物カラマンシーの果汁です。甘酸っぱいさわやかなジュースを「おいしいね!」、「おかわりしたい!」といいながら味わいました。

午前の部の後半は、「ゴミの山で暮らす子どもたち」と題したワークショップを行いました。毎日、異臭、危険物による事故、火災、水質汚染、崩落など、極めて危険な状態でのゴミの山で生活しているフィリピンの子どもの現状を知りました。ゴミの山から少しでもお金になりそうなものを拾い集めては、換金し、家計の足しにと一生懸命に生きる子どもたち。危険と隣り合わせの中での重労働。参加した児童たちに少しでもその現状を体感してもらおうと、今回、新聞紙や広告などをゴミに見立て、拾い集めて分別し、計測し、換金してもらいました。ゴミの山でのゴミ拾いの収入は、たくさん集めても、一日中働いても、僅かな食料相当分のお金にしかならないそうです。同じ地球で生きる子どもなのに、置かれている環境が違うことを知った児童たちは、その「気づき」を今後の生活の中で活かしてくれることでしょう。

このワークショップのために、フィリピンへの人道支援活動を続けている MNKFI (Mirai Ni Kibou Foundation Inc. 未来に希望財団) 日本代表理事の仲田和正さんに多くのアドバイスや資料の提供など協力いただきました。

## (2) 午後の部

テーマ「世界を感じよう 2017

～宇大留学生たちとの交流～

本学には、世界の 30 の国・地域から 237 名の留学生が学んでいます（本学学務部留学生・国際交流課調べ、2017 年 5 月 1 日現在）。今回は、カンボジア、ベトナム、ドイツ、台湾出身の 8 名の留学生が参加しました。外国人児童生徒教育支援や国際理解活動に強い関心を持つ学生団体 HANDS Jr の学生たちが熱心に企画・準備・運営し、留学生と連携しながら、そそれの 4 つの国や地域を中心に学ぶ交流内容を何日も何日も考えました。以下の 3 つの活動を中心に交流することができました。



### ①交流ゲーム A「スプーンレース」

手に持ったスプーンにピンポン球を乗せて大きな円を一周するグループ対抗レースです。ピンポンの“バトン”が渡ると、落とさないように慎重になりつつも、どのチームも 1 位を目指してゴールまでがんばりました。

### ②交流ゲーム B「ふわふわバルーンゲーム」

まず、児童たちはワークシートで、留学生の各言語での指示の数の言い方を学びます。普段耳慣れない発音に悪戦苦闘していました。どのチームも手をつないで丸い円を作り、風船を落とさないように何回連続してポンポンできるかを競いました。数は、最初に学習した留学生の言葉で数えました。

### ③国際理解ゲーム「4 Corners Quiz」

パワーポイントを使って、留学生の出身国ごとに 4 択クイズを出題しました。日本との位置関係についての出題やその国で有名な料理を選ぶクイズなど、留学生たちが用意した問題が出されました。児童が正解だと思う答えのコーナーに移動してもらい、正解を発表し、留学生による補足説明を行いました。例えば、「A にんじん、B かぼちゃ、C 白菜、D キャベツのうち、カンボジアから日本へ伝わった野菜はどれでしょうか？」の問いに、A だと思ふ人は A のコーナー



## II 活動報告

に移動します。当たれば、のちにポイント換算するシールをもらえます。すぐにわかってしまう問題もあれば、私たち大人もどれだろうと少し悩む問題もありました。

閉校式では、宇都宮市東生涯学習センターの大貫真一所長、宇都宮大学側を代表して原田真



子先生よりあいさついただきました。解散後、学生や留学生たちに駆け寄ってあいさつしたり、握手をしたり、別れを名残惜しそうな児童たちを見て、この交流の目的を達成できたのではないかと思いました。

### 4. 事業の成果

参加小学生からは、本スクールに対して概ね高い評価が得られました。アンケート結果の内容等から、フィリピンをテーマとする参加型授業と本学留学生との交流事業に参加したことで、参加小学生の国際的な関心や国際感覚が大いに増大したと判断されます。また、本学留学生と日本人学生は本スクールの企画・運営を担ったことで、実践的な国際理解教育を推進する力を向上させました。参観いただいた保護者の方々からも非常に有意義なイベントだとの評価をいただきました。

### 5. 今後の展望

国際的な視野や感覚を養い、多文化共生教育実践は初等・中等教育で益々重要となっております。しかし、学校単独での教育実践はなかなか進んでいないのが実情です。従って、この様なスクールの重要性は極めて高いといえます。参加者からは概ね高い評価を得てきました。リピーターも何人か出ています。この大きな理由は、学校現場での国際理解教育がまだ少ないことに加え、本スクールでは、大学と行政が協力連携しながら何度も協議を重ねて用意周到に計画を立て実施してきたことにあります。また、近年、小学校でも英語教育が取り入れられ、アメリカをはじめとする英語圏の異文化理解や交流は進んでいるものの、英語圏以外、とりわけアジアの文化に目を向ける機会にはあまり恵まれていない小学生にとって、国際的な問題関心と国際感覚を養う貴重な場となっており、参加大学生にとっては実践的な国際理解教育を経験する貴重な場となっています。国際学部の学生・大学院生、留学生と学生団体 HANDS Jr の人的資源等を活かした効果的な地域貢献・人材育成事業となっており、今後も継続的に実施していきたいです。



## フィリピンについての国際理解講座を担当して

宇都宮大学国際学部 4年

小野寺まゆみ

今年のサマースクールは台風の影響で一日目が中止になったため、二日目に二日分を凝縮した内容になりました。しかし学生スタッフ達と宇都

宮市東生涯学習センターのご協力、そしてクイズにゲームと積極的な子供たちのおかげで、頭も体も動かせる良い一日とすることが出来ました。



午前中の講義は『世界を知ろう&世界から学ぼう2017～フィリピン編～』でした。フィリピン編ではフィリピンについてのクイズ、歌、言語、バンブーダンス、ワークショップ、カラマンシージュースの試飲と盛りだくさんな内容でした。皆国名も場所も把握していましたが、「フィリピンという国をどこで知ったの?」という質問には、学校や日常生活ではなく意外にも「課外活動で知った」という回答を得られたことは新鮮でした。そんなかれらはクイズで少し発展させた質問にも悩みながらも嬉々として答えていたのが印象的でした。

ワークショップでは、「ゴミ山に暮らす子供たち」という一歩国際社会問題に踏み込んだ内容を取り上げました。外から見える国のある面が

楽しく明るいものでも、それが全てとは限りません。私たちから見えるゴミ山が、そこに住むかれらにとっては家であり職場であり宝の山であるように、見る方向が違えば捉え方も異なり、大事にしているものも違うんだということを感じてもらえていたら嬉しいです。

最後に国際協力の一つとして日本に居ながらでることについて伝えました。みんなの机の中で使われずに眠ったままの消しゴムやペンが、フィリピンの子供たちがその日を生きるためではなく、未来を生きるための勉強に繋がるかもしれません。

今回のサマースクールで感じたことを心の糧にして、世界と自分を同じフィールドで考えられる大人になってほしいと思います。

## シリーズ:学生ボランティア派遣体験記19

# 外国人児童支援から教えられたこと

宇都宮大学国際学部1年 春原歩美

私は昨年6月から、栃木県那須塩原市の小学校で、様々な国にルーツを持つ子供たちの支援をしています。私は入学前からこのHANDSプロジェクトに興味を持っていて、支援者の一人となって活動したいという思いがありました。学校生活にも慣れ、ボランティアを始めようと思ったそんな時でした。派遣募集の広告の中に、自宅の近くの小学校があったのです。「大学から1時間以上もかかるこの小学校に行くのは、実家生の私しかない!」とこの出会いに運命を感じ、支援に行くことを決めました。支援先の小学校は非常に規模が大きく、外国人児童も多く通っています。そのため、外国人児童のための特別教室も設けてあり、毎時間たくさんの児童が教室にやってきます。しかし支援とはいっても、特定の児童に日本語の授業をしてあげるわけでも、特定の授業科目を担当しているわけでもありません。支援の方法は、毎週月曜の1・2時間目に「ヘルプが必要な子に寄り添う」といったものです。

はじめのうちは、主にボリビアからきた3年生

の男の子についていました。既に1年近く日本に住んでいるということもあり、日本語はある程度通じるのですが、特別支援学級での学習も必要な児童であるため、長い時間座っていられるか等、生活すべてにおいての配慮も必要とされました。一度は机に向かったものの集中が途切れたり、機嫌が悪くなったりして教室を抜け出してしまうこともありました。それでも何週間かボランティアを続けるうちに、私にも心を開いてくれるようになり、今では一緒に45分の授業に参加できるようになりました。後期には、フィリピンからの兄妹が仲間に加わりました。2人は全く日本語が分からなかったため、英語での対応となりました。「英語を話すことはそこまで苦手ではないし、小学生相手ならきっと大丈夫だろう」と思っていたことが実際にやってみると、単に通訳することと英語を用いて“教える”ことは全く違うということを感じました。また、彼らにとって英語を使える人は頼れる存在です。しかし、最終目標は日本語を使えるように、クラスの輪に入れるようにすることであるため、い

## II 活動報告

つまでもこちらが通訳してあげる事はできません。日本語が分からない子に日本語で意思疎通を図ろうとする事の難しさを知りました。

今回の支援は私にとって初めての長期支援で、まだまだ分からないことだらけですが、この経

験から、日本にいる外国籍の児童や日本語支援が必要な児童を取り巻く様々な課題や、支援することの難しさを学ぶことができました。今後も自分でできることを模索しながら、少しでも児童たちの役に立ちたいと思っています。

# AMAUTA支援を通して感じたこと



宇都宮大学国際学部2年

アギーレ ナルミ

HANDSによる外国人児童生徒教育支援活動の一つに、「AMAUTA」の学習支援がある。「AMAUTA」とは、真岡市にあるスペイン語母語保持教室である。参加している子どもたちは、ペルーにルーツのある子どもたちが多く、小学校1年生から中学生まで幅広い年齢の多くの子どもが参加している。普段の教室では、子どもたちの母語であるスペイン語や母文化を忘れさせないための活動が子どもたちの保護者によって行われている。その一方で、毎年夏休みには、HANDSジュニアや学生ボランティアによって、子どもたちの学習支援（主に夏休みの宿題）を行っている。今年度は、18:15～20:00の時間帯を利用し、全5回行った。

自分と同じペルーにルーツを持つという共通性があることから、この活動に参加することをとても楽しみにしていた。教室に入ってみると、子どもたちはスペイン語で話したり、ペルー流のあいさつをかわしたりしていた。ありのままの姿でいる子どもたちの姿を見て安心したと同時に、自分自身のもう一つの故郷であるペルーにいるかのように感じた。みんなに自己紹介をし、スペイン語を話すことができるということが子どもたちにわかると、多くの子どもたちが話しかけてくれた。もちろん日本語での会話を交わすことのできる子どもたちであるが、教室の中ではスペイン語が飛び交っていた。

外国人児童生徒教育に関する授業や日本語教育に関する授業において、学習言語の困難さを学んでいたが、実際に学習支援をする中で、そ

の現状を実感する場面は多かった。多くの子どもたちは、問題文を読もうとすると漢字が読めず、設問を理解するという一番初めの段階でつまづいてしまっていた。また、設問を読めても、言葉の言い回しが話し言葉と異なることから、理解に苦しむ子どもたちもいた。やさしい、簡単な日本語で設問を説明したり、スペイン語に訳して設問の説明をしたりと、理解してもらえるような工夫を心掛けた。しかし、その説明をしている中でまた理解のできない言葉があり、かえって子どもを混乱させてしまうこともあった。スペイン語での説明においても同様であった。教えることの難しさを感じた瞬間であった。学習では困難を感じている子どもたちでも、休憩時間になると、みんな普通の一人の子どもであった。趣味、好きなこと、好きな食べ物、などいろいろなことを話してくれた。しかし、その中で学校生活の話は出てこず、かれらにとって学校生活は、苦痛の場になっているのだろうかや疑問を持った。日本の子どもたちにとっては当たり前である1冊の夏休みの宿題は、AMAUTAの子どもたちにはどれだけ重くのしかかっているのだろうか。また夏休みの宿題でなくとも、普段の学校生活では、何を思って何を考えて生活しているのだろうか。日本語を学習することへの動機付けが困難である中で、子どもたち自身が抱えるストレスもあるのではないだろうかと感じた。

AMAUTAの支援を通して、このような状況

の中で学生ボランティアとして何ができるのだろうか。学習支援の重要性はもちろんである。しかし、子どもたちの身近な存在の一人として、精神的な心のつながりを持つことも重要であるのではないかと感じた。日本語ができなくとも、みんな一人の人間であり、そして一人の子どもである。小学校・中学校という成長段階において、様々な面で大きな影響を受けるであろう子どもたちが、いかにありのままの姿でいられるような環境を作ってあげることも、支援の一つであり、学習意欲にも繋がるのではないかと感じた。そのためには、一人一人の子どもの多様な背景に向き合

い、理解をしようとする努力をする必要がある。

身近にある様々な問題を実際に感じる事ができるこの活動を、今後も続けていきたい。



## 小学校での夏期集団支援 ボランティアに参加した動機と感想

宇都宮大学国際学部 3年

佐々木千暁

私は、7月21日と7月27日の計2回、鹿沼市立みどりが丘小学校にボランティアに行きました。1回目は子どもたちの夏休みの宿題の学習支援、2回目は地域の方が主催するイベントのお手伝いとして、調理実習のクラスに参加しました。2回の活動を通して子どもたちと過ごした時間はとても有意義なものでした。ここでは私がボランティアに参加した動機と参加してみたの感想を記したいと思います。

私がボランティアに参加する動機となったのは、大学の授業と自身のアルバイト経験からでした。まず大学の授業についてですが、私はいくつかの授業で、日本に住む外国人児童生徒が学習面で苦労している現状を知りました。日常会話に問題はなくても学習で使う言葉は難しいこと、試験を行うことで能力を判断し合格者を決める「適格者主義」の高校入試が外国人児童生徒にとって進学の大きな壁になっているということなどです。日本に生まれ、ずっと日本で生活してきた私でも入試や進学は不安でいっぱいであるのに、ましてや不慣れた言語に囲まれて毎日学校生活を送る外国人児童生徒の不安は計り知れないものだと

思いました。そこで私も少しでもかれらの力になりたいと考えるようになったのです。

また、アルバイト経験については、私は以前、塾の講師として小学生・中学生を対象に勉強のサポートをするアルバイトをしていました。積極的に質問する子、なかなか集中して取り組めない子など様々な生徒がいる中で、私は自分なりに子どもたち一人ひとりのペースに合わせてながら教えるよう心がけていました。そして今年度、この外国人児童生徒の学習支援ボランティアの募集を見て、かつての自分のアルバイト経験を生かしてかれらの力になれるのではないかと思い、ボランティアに参加することを決めました。

次に参加してみたの感想を記したいと思います。最初は私も子どもたちもお互いに少し緊張していましたが、そのうち打ち解けて家族のことや好きなことなどいろいろ話してくれました。学習支援と調理実習という2種類の活動を通じて元気な子どもたちと関わって、どちらもとても楽しみながらボランティアに参加することができました。もちろん楽しかっただけでなく「この問題は どう説明したらよいのだろう」と悩む

## II 活動報告

こともありましたが、一生懸命に学習や調理に取り組む子どもたちの様子を見て、私自身も力をもらいながら、接し方や言い方を考えて活動しました。かつて塾の講師をしていた経験から、「教える」ということに少し慣れたつもりでいま

したが、子どもたち一人ひとりに時間をかけて向き合って「教える」ことが大切であると、今回のボランティアを通じて分かりました。この活動が将来の可能性を秘めた子どもたちの支えに少しでもなれたら嬉しいです。

# 外国人生徒のための学習支援 「小山市学びの教室」を通して



宇都宮大学国際学部1年

丁 美 誉

私は大学入学前から外国人労働者問題について興味がありました。入試のために外国人労働者について色々と調べ、外国人労働者が日本において直面している状況の厳しさを知りました。そして、宇都宮大学入学後、大学で実施していた様々なプロジェクトの説明会に参加し、HANDSに引き付けられました。それが、外国人労働者たちの子供について考えるきっかけになりました。

現在少子高齢化が進んでいる中、社会を支える基盤となる若者が減少し、外国人労働者がその役を補っています。労働者の大半は専門語や日常生活に必要な最低限の日本語しか身につけていないまま来日する方が多く、仕事場でもそれしか使わないので日本語が上手になる機会もないまま、子供たちを日本へ迎え、学校に通わせるケースもあります。

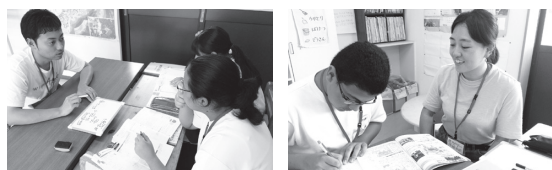
私は中学校時代に中国の大連市から来日しました。当時は日本語をしゃべれないので、クラスメイトとはコミュニケーションをとれないまま一年間ひとりぼっちの学校生活を送りました。外国人生徒がどれだけ不安になるのかがよくわかる自分が彼らの力になりたいと思い、HANDSのボランティアに応募しました。

初めて参加したのは「AMAUTA」というスペイン語母語保持教室でした。その後、小山市の学びの教室での支援を続けました。主な活動内容は課題やテスト勉強の手伝いでした。学びの教室に初めて参加したときは中学校一年生の

フィリピン出身の女の子二人を担当しました。二人とも日本語で普通にコミュニケーションをとれる日本語上手な子でした。わからない所を素直に言ってくれるし、数学の公式を理解するために何度も質問してくれました。もう一回お願いと言って折れずに立ち向かっている姿を見て感心しました。日常会話ができてでも勉強についての専門用語が彼らにとっての山でした。ルート、通分、約分などの名詞が理解しづらい様子で、かえって英語で説明したほうが理解しやすかったようでした。そのため、毎回電子辞書やスマホで自分の知らない単語について調べていました。国語課題では、日本ならではの感情表現や気持ちを形容する単語に対しては彼女たちも私も苦戦しました。英語には似ている表現がなく、単語の意味は理解しているのにピッタリとした説明の仕方がよくわからない、似たような言葉で伝えようとしても何かが違うと感じました。授業で日本人のクラスメイトがすんなり受け入れる知識が彼らにとっては戸惑ってしまうものとなり、その戸惑いが大きくなると繋がっていた知識理解が途切れ、わからないものがどんどん増えていくのだと思います。

学びの教室に参加している子供たちは、勉強に集中し、熱心に質問をします。一度理解すると同じ種類の問題をスラスラ解けるようになるだけでなく、「こんな条件を加えたらどうなるのですか」など発展させる学習意欲をもっている

人も多いです。高校に進学したいと考えている子どもも多く、テストで一問でも多く解けてほしいと思い、活動し続けました。



## 「イヤーエンドパーティ」に参加して

宇都宮大学国際学部3年

菅間菜月

「イヤーエンドパーティ 2017」は、12月9日に真岡市生涯学習会館で開催されました。このイベントは、真岡市国際交流協会が毎年開催しているもので、真岡市在住の外国人との触れ合いを目的として行われています。南米、主にペルーにルーツのある子どもたちへ、保護者らがスペイン語母語保持を目的とし学習支援する教室 AMAUTA が真岡市にあります。私たち HANDS Jr の学生たちが中心となって、毎年、夏休みに、その AMAUTA の子どもたちへ夏休みの課題の支援にボランティア協力しているご縁で、このパーティーへ招かれています。

今回は、宇都宮大学 HANDS Jr の学生など5名、留学生9名(中国、ベトナム、チェコ、タジキスタン、エジプト、モンゴル、マレーシア)、ていだ太鼓サークルの学生9名(代表 教育学部2年 吉澤さくらさん)、職員1名が参加しました。

パーティでは、参加者らが準備した多国籍料理がふるまわれ、参加者はそれぞれの料理を1品100円で買って楽しむことができます。また、ハワイアンダンスや二胡三重奏、パコージ演奏、サンバ演奏、真岡もめん踊りなど、各国や地域の伝

統的な出し物が披露されました。普段なかなか見ることのできない踊りや歌を楽しむことができました。中でも特に、ペルー民族舞踊のダンスチーム「ダンサス・デル・ペルー」の皆さんによるフラメンコはとても華麗で、会場が歓声に包まれました。

今回初参加になる宇都宮大学の学生団体ていだ太鼓の皆さんは、エイサー「夏太鼓」と「島人ぬ宝」を披露しました。迫力ある演奏でも盛り上がり、また、終演後にはメンバーの皆さんと写真撮影をする参加者がとても多かったです。

わたしたち宇都宮大学からは、HANDS Jr の学生や留学生たちが「We Wish You a Merry Christmas」を会場の皆さんに披露しました。

クリスマスムードで終始温かく和やかな雰囲気、真岡市の日本人も外国の方も参加者は皆、笑顔に溢れていたのが印象的なパーティでした。また、普段体験することがなかなかない、各国の文化を感じることもできる、すばらしいパーティだと思います。こういった地域の外国の方々との交流の機会である「イヤーエンドパーティ」にぜひまた参加したいです。



## 事務局だより

### 平成29年度の活動

- ・外国人児童生徒教育推進協議会（栃木県教育委員会 後援）  
第1回：9月7日、第2回：1月16日
- ・外国人児童生徒支援のための学生ボランティア派遣（通年）
- ・真岡市外国人児童生徒支援のための学生ボランティア夏期集団派遣（7/27、8/3、8/4、8/18、8/24）
- ・鹿沼市立みどりが丘小学校への学生ボランティア夏期集団派遣（7/21、7/24、7/25、7/26、7/27）
- ・小山市学びの教室外国人生徒支援のための学生ボランティア派遣  
第Ⅰ期：8月19日～10月14日全5回、第Ⅱ期：11月11日～3月3日全9回
- ・子ども国際理解サマースクール：8月9日（宇都宮市東生涯学習センターとの協働）
- ・国際理解教育の実践：9月29日（真岡市立真岡東小学校）
- ・多言語による高校進学ガイダンス  
大田原市：9月23日（TOKOTOKOおおたわら）  
\*共催：大田原市教育委員会、那須塩原市教育委員会  
栃木市：9月30日（栃木市役所正庁）  
\*共催：栃木市教育委員会  
本学：10月29日（本学大会館）  
\*後援：宇都宮市教育委員会・栃木県国際交流協会・宇都宮市国際交流協会
- ・授業科目「グローバル化と外国人児童生徒教育」開講（後期）
- ・真岡市国際交流協会「イヤー・エンド・パーティー」での外国人児童生徒との交流：12月9日
- ・ニュースレター『HANDSnext』第23号の刊行：2月7日
- ・外国人生徒進路調査（第8回栃木県）：3月～

### 関係機関からのお知らせ



#### 授業で活用できる！JICA国際理解教育支援プログラムのご紹介

JICAでは、国際協力への理解と関心を高めるためのさまざまな国際理解教育／開発教育支援メニューを提供しています。世界を学ぶ授業作りにはぜひお役立てください。

- |  |   |
|--|---|
| <b>国際協力出前講座</b>                                  | 途上国で活動してきた青年海外協力隊・シニア海外ボランティア経験者などを講師として紹介します。                                    |
| <b>JICA筑波施設訪問</b>                                | JICA筑波では途上国の国づくりのため「研修員の受け入れ事業」を行っています。国際協力・異文化への理解を深めて頂けるようJICA事業紹介、施設見学を行っています。 |
| <b>国際理解教育実践セミナー</b>                              | 国際理解教育の基本的な考えや手法を学ぶ講座です。参加型学習の手法を体験しながら国際理解等の授業作りにお役立てください。（栃木県では毎年2月頃に開催）        |
| その他、ODA現場を実際に訪れる <b>教師海外研修等</b> の教員向けプログラムもあります。 |   |

各種プログラムのお申込み方法や詳細についてはHPでご確認頂くか、JICA 栃木デスクまでお気軽にご連絡ください。

【お問合せ】 JICA 栃木デスク（とちぎ国際交流センター内）

TEL 028-621-0777 / Email [jicadpd-desk-tochigiken@jica.go.jp](mailto:jicadpd-desk-tochigiken@jica.go.jp)

[JICA 筑波](#) [国際理解教育プログラム](#) [検索](#)

## HANDS next とちぎ多文化共生教育通信 第23号

2018年2月7日発行

発行：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDSプロジェクト部門

（代表：田巻松雄）

事務局：〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（担当 船山千恵）

TEL/FAX 028 (649) 5196 E-mail [funayama@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp](mailto:funayama@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp)

印刷：鈴木印刷株式会社 〒321-0901 栃木県宇都宮市平出町3751-11